



ARMENIA / JAPAN

Agency for Cultural Affairs Commissioned Project 2023

令和5(2023)年度文化庁委託
文化遺産国際協力拠点交流事業

アルメニア共和国における
文化遺産保護のための高度人材育成拠点交流事業

国立大学法人 佐賀大学芸術地域デザイン学部



ARMENIA / JAPAN





令和5(2023)年度 文化庁委託
文化遺産国際協力拠点交流事業

アルメニア共和国における
文化遺産保護のための
高度人材育成拠点交流事業

2023-2024

事業報告



ごあいさつ

はじめに、アルメニアの皆様、特に全アルメニア総主教・カトリコスガレギン2世に日本との交流に対して心より御礼申し上げたいと思います。

2020年度から佐賀大学は文化庁の拠点交流事業を受託し、アルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館と佐賀大学が拠点機関として交流する幸運に恵まれました。世界が新型コロナウイルスの感染症拡大で困難に直面しているなかであって、2020-21年度の2年間はリモートで、その後収束したことから2022年9月にアルメニアで研修を行いました。そして2023度は新たに高度な人材育成を目指し、7月に4名のアルメニア人を日本に招聘、日本の文化財の保存修復を視察する研修を行い、12月にはアルメニアで高度な染織品保存修復と保存科学の研修を実施し、双方向的な交流を実現しました。このように本事業を通じて文化遺産の保護を担うアルメニアの人材育成に国境を越えて協力できたことを喜ばしく思います。この活動は決して易しいものではありませんが、志を一つに希望をもって事業ができたことは幸いです。アルメニア正教会ナタン・ホヴァニシアン大司教、エチミアジン大聖堂附属博物館カラペチャン館長、アルメニア共和国文化省、歴史文化遺産科学研究センター、アルメニア国立歴史博物館、在アルメニア日本大使館、東京文化財研究所、そして本事業にご協力いただきました皆様の多大なるご尽力に深く感謝申し上げます。

佐賀大学芸術地域デザイン学部
学部長 吉住 磨子



エチミアジン大聖堂付属博物館について

エチミアジン大聖堂はアルメニア正教会の総本山であり、首都エレバンから車で30分ほどの距離に位置します。「エチミアジンの大聖堂と教会群ならびにズヴァルトノツの考古遺跡」は2000年にユネスコの世界遺産に登録されています。大聖堂の敷地内にあるクリミヤン博物館は1897年に開館し、南コーカサス地方で最初の博物館でした。アルメニアは1991年にソビエト連邦から独立しましたが、長い間宗教活動が制限されていたことから、宝物の多くは倉庫にしまわれた状況でした。1982年に聖堂の宝物館が開館し、2004-2005年にクリミヤン博物館が再開し、2014年にはルベン・セバク美術館が開館し、徐々に宝物が公開されるようになりましたが、修復が必要な宝物が多数あります。加えて各地に点在するアルメニア正教会にも修復を待つ宝物があります。エチミアジン大聖堂付属博物館は地下を改修して収蔵庫と修復室の整備がすすめられ、2023年度に日本の外務省から草の根無償資金協力で購入された文化財修復のための専門機材が設置される運びとなりました。ここではアルメニア正教会の宝物を一同に保存修復する拠点施設として構想されています。エチミアジン大聖堂が長年の修復を終え、一般に公開されれば、世界中の人々が聖堂とともに博物館を訪れることが期待されます。



エチミアジン大聖堂付属博物館



目次

事業の目的	6
実施事業・期間・拠点	6
染織品保存修復に関する日本とアルメニアの協力実績について	7
関係者一覧	8
スケジュール	9

現地研修

1 <small>日本研修</small> 日本の博物館と文化財の保存修復	11
2 <small>アルメニア研修</small> 染織品保存修復研修	29
<small>石井 美恵 横山 翠</small>	
3 <small>アルメニア研修</small> 保存科学研修	33
<small>松島 朝秀</small>	
視察	36



エチミアジン大聖堂

事業の目的

佐賀大学はアルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館を相手国拠点とし、アルメニア立歴史文化遺産科学研究センターと連携し、博物館資料、とりわけ祭礼染織品、考古資料を対象に、調査研究と保存修復のさらなる知識と技能の向上のため、本年度は、①博物館における資料保存と展示、②染織品保存修復、③考古学、④保存科学の4分野について研修を行い、研究交流、技術移転を通じて同国における若手・中堅の高度な人材育成に寄与することを目的としています。

実施事業

今年度は高度な文化財人材の育成を目指し、日本とアルメニアの拠点機関の訪問交流を行いました。7月は交流拠点のエチミアジン大聖堂附属博物館およびアルメニア国立歴史博物館。といるはセンターから4名の博物館専門職員が来日して日本で研修を行いました。11月にリモート研修による講義、そして12月には3名の日本人講師をアルメニアに派遣し、エチミアジン大聖堂附属博物館にて研修を行いました。

期 間

2023年5月7日～2024年3月31日

日本拠点

国立大学法人佐賀大学芸術地域デザイン学部
学部長 吉住 磨子
〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1
Tel. (+81) 952-28-8349

アルメニア交流拠点

アルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館
館長：アソギク・カラペチャン
110 Vagharshapat, Republic of Armenia
Tel. (+374) 10 51 71 10



ザリネ・ホヴァキミヤン、シュシャン・ハコプヤン、マルジャン・ペトロシヤン、マロ・ハルテウニアン
横山翠、ルザン・ホジキヤン、石井美恵、青木豊大使、松島朝秀、アソグク・カラベチャン館長、テル・セバク・サルベキヤン館長(美術館)

染織品保存修復に関する日本とアルメニアの協力実績について

- 1 2023年 文化庁委託事業令和5年度文化遺産国際協力拠点交流事業「アルメニア共和国における文化遺産保護のための人材育成交流事業」国立大学法人佐賀大学、アルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館
- 2 2022年 文化庁委託事業令和4年度文化遺産国際協力拠点交流事業「アルメニア共和国における文化遺産保護のための人材育成交流事業」国立大学法人佐賀大学、アルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館
- 3 2021年 文化庁令和3年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業(専門家交流)実施委託業務「アルメニア共和国に対する文化遺産保護国際貢献事業:文化遺産記録のデジタルアーカイブの加速化および「文化財難民」の基礎調査」国立大学法人佐賀大学、アルメニア国立歴史文化遺産科学研究センター、同センター附属文化遺産地域センター
- 4 2020年 文化庁委託事業令和2年度文化遺産国際協力拠点交流事業「アルメニア共和国における文化遺産保護のための人材育成交流事業」国立大学法人佐賀大学、アルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館
- 5 2017-2019年 東京文化財研究所「アルメニア共和国における染織品保存修復研修」
- 6 2014年 美術工芸振興佐藤基金助成研究「アルメニア正教会エチミアジン大聖堂附属博物館の染織文化財の調査と保存」
- 7 2010-2014年 国際交流基金文化協力主催事業「アルメニア歴史博物館における染織品保存修復ワークショップ」
- 8 2010年 平山郁夫シルクロード美術館研究助成「アルメニアの染織品保存修復調査」

講師

石井 美恵 (佐賀大学 芸術地域デザイン学部)

横山 翠 (NHK文化センター)

松島 朝秀 (高知大学 教師教育センター)

星 恵理子 (女子美術大学)

間舎 裕生 (東京文化財研究所)

プロジェクト事務局

佐賀大学芸術地域デザイン学部

コーディネーター

ルザン・ホジキヤン

南江 秀一

アルメニア・日本教育・文化交流センター
「いろは」NGO

<https://irohacenter.com/ja/>

翻訳・通訳 (アルメニア語)

ルザン・ホジキヤン

シュシヤン・ハコブヤン

ザリネ・ホヴァキミヤン

英文校正

ヴァネッサ・ブレイ

作成した教材

2020-2024事業の教材をまとめた教科書を制作した。

参加者

エチミアジン大聖堂付属博物館

テル・セバク・サルベキヤン (ルベン・セバク美術館館長、絵画修復家)

マルジャン(マリネ)・ペトロシヤン (染織品保存修復家)

アルメニア国立歴史博物館

マロ・ハルトゥニアン (主任染織品保存修復家)

アルメニア日本教育・文化交流センター「いろは」NGO

シュシヤン・ハコブヤン (日本語講師)

アルメニア歴史文化遺産科学研究センター

エレナ・アトヤンツ (保存修復室長)

アストギク・メルコニヤン (考古遺物保存修復家)

マテナダラン古文書館

ガヤネ・エヤズリヤン (保存修復室長)

アルメン・ホロジヤン (保存科学者)

日本研修 2023.7.22~30

【内容】

佐賀大学との拠点交流および日本の博物館と文化財の保存修復の視察

佐賀大学美術館特別講義

2023年7月24日

講師：テル・セバク・サリベキヤン(ルベン・セバク美術館館長/エチミアジン大聖堂付属博物館)
 シュシャン・ハコブヤン(日本語講師、アルメニア・日本教育・文化交流センター「いろは」NGO)

特別展『アルメニアと日本の交流の肖像』

視察

研修先：長崎県美術館、出島、長崎原爆資料館、大浦天主堂、(株)松鶴堂染織部、奈良国立博物館、
 (株)文化財保存、東京文化財研究所、国立西洋美術館修復室、東京国立博物館、文化庁等

リモート研修 2023.11.2/9 15:00-17:00

【内容】

保存科学：薄層クロマトグラフィーによる染料分析

講師：星 恵理子



アルメニア研修 2023.12.4~15

【内容】

染織品保存修復：高度な染織品保存修復技術、光学顕微鏡調査法、
 薄層クロマトグラフィーによる染料分析

保存科学：博物館の環境管理、文化財の診断分析

写真・ドキュメンテーション：デジタル一眼レフカメラによる文化財撮影

場所：エチミアジン大聖堂付属博物館

講師：石井 美恵、松島 朝秀、横山 翠



1

日本研修

日本の博物館と 文化財の保存修復



1 日本の博物館と文化財の保存修復

内 容

講 師

石井 美恵(佐賀大学) 横山 翠(NHK文化センター)
土屋 貴哉(佐賀大学) 間舎 裕生(東京文化財研究所)
近藤 恵介(佐賀大学) 松島 朝秀(高知大学)
見藤 素子(佐賀大学)

本邦研修参加者

テル・セバク・サリベキヤン(ルベン・セバク美術館館長、エチミアジン大聖堂付属博物館)
マルジャン(マリネ)・ペトロシヤン(エチミアジン大聖堂付属博物館)
マロ・ハルツニヤン(アルメニア国立歴史博物館)
シュシヤン・ハコブヤン(アルメニア・日本教育・文化交流センター「いろは」NGO)

概 要

日本の博物館資料保存と展示そして文化財の保存修復について研修するために4名のアルメニア人を日本に招聘した。佐賀大学美術館では公開特別講義を行い、サリベキヤン館長とハコブヤン講師が講演した。学生だけでなく、一般市民も聴講した。当日は学生の企画により『日本とアルメニアの交流の肖像展』が開催され、本事業の写真やアルメニアの工芸品とともに、事業に関わる教員の土屋貴哉と近藤恵介の作品も展示した。佐賀大学美術館では見藤素子学芸員が収蔵庫や展示設備を説明し、松島朝秀(高知大学)が絵画の撮影をデモンストレーションして研修を行った。視察では、長崎県美術館のバックヤードを訪問し、原爆資料館、出島、大浦天主堂を見学した。京都では京都国立博物館修理所内の(株)松鶴堂染織部を訪問して染織文化財修理の現場を見学し、奈良では奈良国立博物館修理所内の(株)文化財保存を見学し、関係者らと有意義な意見交換をした。東京では東京文化財研究所と文化庁を表敬訪問し、国立西洋美術館の保存修復室と東京国立博物館の展示を見学した。



出島 和田奈緒学芸員の案内



長崎原爆死没者追悼平和祈念館



大浦天主堂

スケジュール

2023.7.22	東京	来日
2023.7.23	佐賀	佐賀へ到着
2023.7.24	長崎	1. 長崎県美術館 2. 出島 3. 長崎原爆死没者追悼平和祈念館 4. 浦上天主堂 5. 大浦天主堂
2023.7.25	佐賀	佐賀大学特別講義、 佐賀大学美術館「アルメニアと日本の交流の肖像」展
2023.7.26	京都	1. 京都国立博物館修理所(株)松鶴堂染織部 2. 三十三間堂 3. 清水寺
2023.7.27	奈良	1. 奈良国立博物館修理所(株)文化財保存 2. 奈良国立博物館 3. 東大寺
2023.7.28	東京	1. 東京文化財研究所 2. 国立西洋美術館修復室 3. 文化庁
2023.7.29	東京	1. 浅草寺 2. 東京国立博物館
2023.7.30	東京	離日



清水寺



東大寺



浅草寺

2023.7.24 長崎県美術館

小坂智子館長による案内



学芸員による展示ケースの解説



美術館内の竹ノ下絵画修復工房



竹ノ下磨須子氏の紫外線ライトによる絵画調査法の解説

2023.7.25 佐賀大学美術館

『アルメニアと日本の交流の肖像』展と特別講演



学生によるギャラリートーク



高知大学特別講演と佐賀大学美術館の共同研究
岡田三郎助『ある娘の肖像』のX線撮影を見学



松島朝秀先生によるX線撮影の見学



吉住磨子学部長表敬訪問

2023.7.26 京都国立博物館修理所

(株)松鶴堂 染織部 依田尚美主任による案内



2023.7.27 奈良国立博物館

吉岡宏代表による案内



日本の書籍・絵画修理



奈良国立博物館の鳥越俊行先生による展示解説

2023.7.28 国立西洋美術館

保存修復室・保存科学室 邊牟木直美室長の案内



美術品救急箱



保存修復室



彫刻修復室

東京文化財研究所

表敬訪問



齊藤孝正所長

文化庁

文化遺産国際協力室表敬訪問



大川晃平室長

研修報告①

テル・セバク・サルベキヤン

アルメニア正教会エチミアジン大聖堂付属博物館
神父、ルベン・セバク美術館館長、絵画修復家

日本文化や日本人との交流から受けた印象は多岐にわたります。私は壁画や絵画の修復家として、またヨーロッパ美術の研究者そして、またアルメニア使徒教会の神父として、アメリカのニューヨークやシカゴの大都市の有名な美術館を訪れ、イタリアに住み、勉強していたところにヨーロッパを旅し、サンクトペテルブルクの建築物やエルミタージュ美術館を訪れた経験がありますのでもうこの世で驚くことは何一つないと思っていましたが、日本を訪問して、これが大きな間違いだったことに気づかされました。

日本は私に大きな衝撃を与えました。人とのつながりにおいて日本人はとても前向きでの非ポジティブに接してきました。人々が調和にあふれた理想的な世界に共存していて、「ありがとうございます」という感謝の言葉は「こんにちは」という挨拶以上のものであるように感じました。お互いを思いやることを第一に考える、キリスト教で説かれている道徳が日常生活に見られました。道徳が社会で普遍的に通用し、卑劣な行為が起きないような国(社会)を見るのは、神父である私にとっては喜ばしいことでした。

絵画、染織、金属、石、紙の修理に対する日本の皆さんの勤勉さ、黙々とした骨の折れる仕事、そして修理された文化財への用心深さや配慮には目をみはるものがありました。時間の制約もあって微妙なニュアンスを理解することが難しかったことが残念でなりません。

今回の訪日を通じて得た経験や見聞きしたことは、アルメニアの文化財の保存において技術的、精神的に目指したい重要な要素が数多くありました。技術の多くは世界的に知られたものに似ているとはいえ、それらを日本で再確認することができたのも意義深いことでした。日本では、広範なツ-

ルを用いながらも、案外手頃なオプションで作業を行っている様子も見ることができ、興味深い発見がありました。

この場を借りて、この事業を推進している日本政府に深い感謝の意を表したいと思います。北から南まで、文化から日常生活に至るまで、私たちアルメニア人に日本を深く理解させるために最善を尽くし、文化交流や専門家の相互訪問、作業ツールや設備の提供と改善にご協力いただき誠にありがとうございます。

この素晴らしい友情の架け橋となっているのは、アルメニア、特にエチミアジン大聖堂との強い結びつきを持ち、「親善大使」とも言える石井美恵先生です。このような価値あるプロジェクトを実現し続けるために、繰り返しになりますが、日本政府や文化庁を含む多くの関係者に感謝を述べたいと思います。

来日する前も日本について聞いてきましたが、まさに「百聞は一見にしかず」です。特に、現代的な形で仏教精神文化を表現する京都の寺院は、私にとって新たな尊敬の対象となり、新しい世界の発見でした。

もちろん、日本という国にその文化財修復の実際、そして作業全体の概要をよく理解するには、将来的にはどこかの工房で少なくとも1ヶ月間は研修し、個々の作業の詳細な手順と各過程を深く理解する必要があります。

私は再びそのような素晴らしい機会が訪れることを願っています。主催者の皆様、いろはセンターの皆様、そして日本の皆様に、心から「ありがとうございました」と申し上げます。アーメン。

研修報告②

マルジャン(マリネ)・ペトロシヤン

アルメニア正教会エチミアジン大聖堂付属博物館
染織修復家

日本とアルメニアの博物館間の協力は、2011年に始まり現在まで継続しています。まず初めに、本プロジェクトの一環として日本へ招聘してくださいました皆様に、心より感謝の意を表します。これまでアルメニアで開催されたセミナーでは、日本の講師の方々から日本の博物館、伝統、習慣、宗教、文化、生活などについておもしろく聞く機会がありました。そして、今回の訪日で実際に日本の地を踏み、その文化に触れることは、まさに夢のような体験でした。日本から招聘の知らせを受けた際、私の心は大変な喜びで満ち溢れました。日本の博物館における染織品の修復や保存に関する実際を見て学ぶことは、私の専門性を高めるための絶好の機会でした。特に印象的だったのは京都国立博物館修理の(株)松鶴堂染織部と奈良国立博物館館内修理所の(株)文化財保存の工房を見学したことです。ここで染織品と紙の修復作業を見学できたことは、私にとってとても価値ある時間となり、様々な新しい知識を得ることができました。驚いたことと言えば、修復家が床に座って国の重要な文化財や民族衣装を修復していたことです。東京

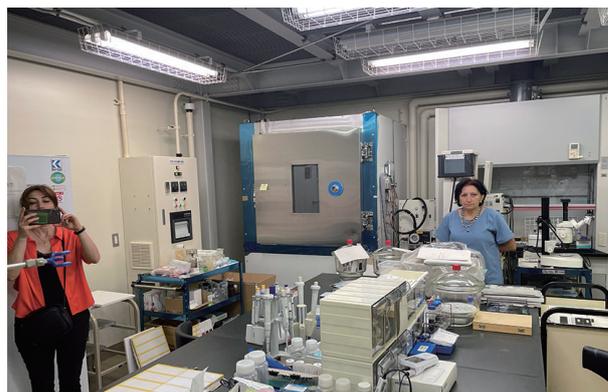
の国立西洋美術館では、保存科学室と保存修復室を案内されました。そこは博物館の収蔵品を記録、研究、保存するための最新の機械や設備が整備されていました。日本の博物館や研究機関は考古学的な遺物の展示方法、時代順に並べられた展示品、技術設備、そして遺物の研究と分析のための設備が非常に充実しており、とても興味深いものでした。東京博物館では、保存修復師が使用する、普段はあまり人目に触れることのない道具や材料が展示されている様子も興味深いものでした。

また、佐賀大学美術館にて学生たちが企画・実施して下さったアルメニアに関する展示会は、非常に特別なものでたいへん感銘を受けました。

日本は、その独自の自然環境と、温かく親切な人々が印象的でした。世界最古の銅製の仏像や建築様式が印象的な寺院、さらに奈良で街中を自由に散歩している鹿は、特に記憶に残る光景でした。また未来において、日本で学び、働き、専門家との交流を深める機会が得られれば幸いです。



(株)松鶴堂染織部



国立西洋美術保存科学室

研修報告③

マロ・ハルトゥニアン

アルメニア国立歴史博物館 博物館資料保存修復部
主任染織品保存修復家

アルメニアと日本の文化的つながりを深めるため、文化芸術分野での協力し、両国の創造的で歴史的な価値を深く理解するためにこのプロジェクトが行われています。2023年7月、石井美恵さんの主導で、アルメニア歴史博物館とアルメニア使徒教会エチミアジン大聖堂附属博物館の専門家たちで日本を訪れました。日本への訪問は充実したもので、その一環として、私たちは多数の美術館や研究所、博物館、そして佐賀大学を訪問し、何世紀にもわたる文化財の保存と修復の手法を学びました。

佐賀大学美術館では日本人学生との交流会が開催されました。そこではアルメニアの文化遺産である様々な染織品、レース、絨毯などが展示されていました。また、アルメニアの歴史、伝統、至宝についての紹介もセバク館長の講演を通じて行われました。質疑応答の時間では、学生からたくさんの質問をうけましたので、私たちは回答するのに必死でした。この交流会は、アルメニア文化の豊かさを日本の学生たちが視覚的に理解できたという意味で、とても有意義であったと思います。このような機会を通じて、私たちはアルメニアという国と、民族の歴史について日本に紹介することができたのはとてもよかったです。

佐賀大学をはじめ、訪問した美術館、博物館、研究機関のレベルが高いことに感銘を受けました。私は日本の歴史や文化の価値を学ぶと共に、文化財の保存や修復への理解をさらに深めることができました。

私たちは日本の多様な文化的、歴史的、宗教的な施設を訪問し、おもてなしを受け、いろいろな方々に会うことができたことは大変光栄です。関係者の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。今後ともこのような交流が続いていくことを願っております。



(株)文化財保存の辰巳大輔氏によるデモンストレーション

研修報告④

シュシャン・ハコブヤン

アルメニア日本・文化教育交流センター「いろは」NGO
日本語講師

2023年7月に日本へ訪問する機会を得ました。これは海外での通訳経験が初めてとなるもので、緊張を覚えつつも期待に胸を膨らませていました。以前にも日本を訪れたことはありましたが、今回の訪日は新たな発見がありました。普段は訪れることのない博物館の内部を見学し、学芸員のみが把握している展示に関する細かなノウハウを学ぶことができました。特に印象深く記憶に残っているのは、各施設のスタッフとの交流のひとつで、とても有意義な時間でした。

各施設の方々は、私たちのたくさんの質問にいつも笑顔で親切に応じてくださり、また機械の操作をデモンストレーションしてくれることもありました。その熱意に深く感銘を受けました。これまで書籍や映像でしか接していなかった分析機器

を実際に目の当たりにし、触れることができたことで、同じような成果をアルメニアで得るためにはどのような工夫が必要なのかについて意見交換を行うなど、とても有益な経験をしました。また、日本が国宝に指定しているような染織品や紙本の作品を間近に見学することができたり、普段の工房や作品の修復に際して直面する課題や新技法について専門家の方々と議論を深めることができたのは、私にとって忘れがたい貴重な体験となりました。博物館や文化財の専門家の作品に対する熱意は、私自身の励みともなりました。今後は日本で得た知見をアルメニアにも還元し、状態の悪い文化財も修復できるようになり、より質の高い展示が可能となることを信じています。



長崎爆心地公園



長崎県美術館

佐賀大学美術館

「アルメニアと日本の交流の肖像」展と特別講演

2023年7月25日(火)10:00-12:00

企画・司会

石井 美恵(佐賀大学)

作品展示

土屋 貴哉(佐賀大学)

近藤 恵介(佐賀大学)

展示設営

酒井 みなみ(学部生)

阿南 昌留(学部生)

山本 千夏(学部生)

展示内容

写真パネル、アルメニアの染織品、土屋貴哉と近藤恵介の作品

特別講演

テル・セバク・サリベキヤン(ルベン・セバク美術館館長、エチミアジン大聖堂付属博物館)

シュシヤン・ハコブヤン(アルメニア・日本教育・文化交流センター「いろは」NGO)

アルメニアの染織品解説

マルジャン(マリネ)・ペトロシヤン(エチミアジン大聖堂付属博物館)

マロ・ハルトゥニヤン(アルメニア国立歴史博物館)

概要

文化庁から佐賀大学が委託されている「文化遺産保護拠点交流事業」について、交流拠点であるアルメニア共和国のエチミアジン大聖堂付属博物館と文化遺産保護の国際協力に関わるアルメニアと佐賀大学の関係者の交流を「肖像」というテーマで紹介する展示と講演会を佐賀大学美術館で開催し、学生と一般向けに交流事業を紹介した。

参加人数

学生 26名、一般 6名 計32名



〈 受講者の感想 〉

- アルメニアについての特別講演は非常に興味深かったです。写真が多いプレゼンテーションだったのでわかりやすく、アルメニアについて知ることができました。伝統的な文化財や収蔵されている美術品の紹介は、どれも日本ではお目にかかれないものなので現地に行ってじっくり鑑賞してみたいです。また、初めて「いろはセンター」について知りましたが、遠い国でも楽しみながら日本語を学んでいる様子は日本人としてすごく嬉しく思いました。美術の展示では実際に同じ学部の先輩方がギャラリートークしてくれたのでわかりやすく、興味を惹かれる作品ばかりでした。特に一番心を惹かれたのはアルメニアのレースで、実際に近くで見るとその緻密で精巧な技術に驚かされました。キャプションにあったように葡萄やイチゴ、教会の柱やアルメニアの山々などがレースで表現されていて素敵でした。普段こうしてアルメニアを含めた海外の人と関わる機会が少ないので、今回の特別講演と展示はとても充実した良い機会だったと思いました。
- アルメニアについて、事前に少ししか調べていなかったのが、講演のスライドで分かりやすく紹介されていていろいろなことを知りました。宗教との結びつきが強く、それゆえに残る建物や遺産があり、雄大な自然もあり素敵な国だと感じました。また、日本の文化を普及させるためのいろはセンターという組織が存在することも初めて知りました。そこで日本人の先生とアルメニアの先生が手を取り合って日本の言語や文化を教えているのも興味深かったです。逆に日本にアルメニアの文化を学ぶことができる施設がないのか気になりました。染織の修復家がアルメニアに2人しかいないことも初めて知りました。日本とアルメニアがお互いの国のためになるような交流がこれから先続いていくとよいなと感じました。展示も、「肖像」という一つのコンセプトに沿って構成されていて、一見関連性がなさそうなものが関連性を持っていて面白かったです。
- 今日アルメニアの講演・展示を見聞きするまでは、アルメニアがどこにあるのかも、どんな歴史がある国なのかも全く知らなかった。そして、何故佐賀大学でこのような講演・展示をするのかもよく分からず、言われるがまま会場へ向かった。講演者のパワーポイントを見て、アルメニアについてほんの少しではあるが理解が出来た。「肖像」に関する展示を見ていく中で印象に残ったものがある。それが「蛇模様塩袋」だ。ギャラリートークの中で、「日本で塩が何かを清める意味を持つように、海外でも塩は貴重なもの、特別なものとして昔から扱われてきた」と言われていた。塩に対する考え方が各国で似た部分があることは興味深いと感じた。「蛇模様塩袋」は非常にきめ細く織られており、少し濁ったような色味は個人的に凄く好きだった。アルメニアと繋がりのある佐賀大学に入学したのも何かのご縁だと思うので、これからアルメニアについて自分でも色々調べてみようと思った。
- 今回特に驚いたのは、カーペットと絨毯の違いについてです。今までその違いを知らず、特別講演が終わった後、アルメニアで修復師を務めている女性の方にお話を聞いたところ、実際に展示してあったバッグなど実物で、織り方の違いについて丁寧に教えていただきました。さらになぜ絵画ではなく絨毯やカーペットにキリスト教やアルメニアの生活からインスパイアされたモチーフが織りこまれるのかについても教えていただきました。言語を直接は理解できませんでしたが、通訳の方やジェスチャーで、文化や言語の壁を超えて、貴重なお話を聞くことができ本当によかったです。またこのような機会があれば参加したいのと、実際に私もアルメニアに行くことができたらなと思います。

〈 受講者の感想 〉

- この授業を受ける前、私はアルメニアについてほとんど知らなかった。だが今回アルメニアの成り立ちや文化についてのお話しと展示で、アルメニアについて多くのことを知ることができた。日本の象徴的な山として富士山があるように、アルメニアにはアララト山があると知った。また日本で重要な文化財として仏像やお寺、神社があるように、アルメニアにはキリスト教の教会や聖具が文化財として保存されていることがわかった。アルメニアは特にキリスト教を世界で初めて国教とした国として、キリスト教にまつわるお話しが多いと感じた。佐賀大学美術館で行われていた特別展示では、「肖像」をテーマとしてアルメニアを表すものやアルメニアと日本の関係を連想させるものが展示されていた。特に印象に残っているのは、レースである。レースは、キリスト教を表す文様にアララト山を表す外周のモチーフがあり、アルメニアそのものを象徴しているということがよくわかった。豊かな自然と文化を有するアルメニアについてほんの少しでも知れたことを嬉しく思う。
- 事前に調べていた情報だと自然が豊かで教会が多くまるでRPGの世界だな、と思っていた。講演会を聞いてまさにその通りで山がとても綺麗で、講演をしてくださった神父の方の格好も素敵であった。一番印象に残っているのは教会の中の装飾で、私たちは写真でしか見ることができないけれど目の前に見たらどれだけ綺麗なのだろうと思った。ステンドグラスやその他の細かな装飾が美しく、一つ一つじっくり見てみたいと思った。いろはセンターによる日本との交流も私が想像していたより盛んで、日本のことに興味を持ってくれているアルメニア人が多いのでとても嬉しく思った。日本の行事を楽しみながら体験していて私を始め多くの日本人よりも日本の行事を堪能しているのではないだろうか。私が日本画を専攻しているため、日本画のことも交流の一つに取り上げられていてとても嬉しかった。アルメニアのレースなどは最初に見た時は細かな装飾だと思わなかったが、修復家の説明を聞き、山やイチゴなどアルメニアの事物をモチーフにしていたと知り驚いた。他にもキリスト教を国教に初めてした国だと聞いて同じく驚愕した。講演はあっという間に終わってしまい、内容の詰まったものであったため機会があればまた他国との交流や美術品を見てみたいと思った。

アルメニアの染織品



塩袋(綴織)



絨毯バッグ(左右均衡結び)



ニードルレース(単一連環結び)

展示



土屋貴哉《Pairs/Spares》(2004)



近藤恵介《私とその状況》(2018)

特別講義①

テル・セバク・サルベキヤン

エチミアジン大聖堂付属博物館

アルメニア使徒教会神父、ルベン・セバク美術館館長、絵画修復家

アルメニア高地は、数千年にわたりアルメニア人によって発展し、創造されてきた歴史深い地域です。この地域の大半は淡水源と河川に恵まれた山岳地帯に位置し、古代の国々によって「エデンの園」と称されていました。また、チグリス川、ユーフラテス川、クラ川、アラス川(聖書ではピション、ギホンと呼ばれる)の源流地としても知られています。

アララト山は神聖な山のひとつであり、日本の皆様にとっては富士山のような存在です。ノアの方舟がアララト山の斜面に漂着し、聖書に記される洪水後の新たな人類の始まりの地とされています。もう一つの重要な山はアラガツ山です。四つの峰を有するこの山は、アルメニアの宗教家である聖グレゴリウス・ザ・イルミネーターのビジョンと、キリスト教を国教とする1700年の歴史と深く関連しています。アラガツ山は、絶えることなく輝き続ける灯火のように、世界中のアルメニア人に光と知恵を提供しています。

アルメニア使徒教会のもう一つの象徴として、総本山であるエチミアジン大聖堂が挙げられます。アルメニアに対する敵対的な攻撃、荒廃、および数え切れない困難に直面しながらも、エチミアジン総本山は建立以来、約2000年にわたりアルメニア人の精神的な支えとしてその役割を果たしてきました。これは世界で最初に建てられたキリスト教の教会の一つであり、特徴的な十字架形のドーム型屋根を有する教会です。

アジアとヨーロッパが交わる地域に居住するアルメニア人は、古代より貿易を通じて世界各地で活動し、これらの文化を繋ぐ役割を常に果たしてきました。

19世紀後半にアルメニア人が日本に初めて来たとされています。日本は、アルメニア人コミュニティが定着していない数少ない国の一つです。日本に

移住したアルメニア人の多くは、インドからの貿易目的でやって来たインド系アルメニア人でした。1870年には、カルカッタの貿易会社「アブガー・アンド・カンパニー」が日本との貿易を開始し、1880年代半ばには神戸、横浜、長崎といった都市とシンガポール、香港、ペナン、カルカッタとを結びつけました。

1890年代における日本のアルメニア人コミュニティの著名な代表者の一人は、「アガベック・アンド・カンパニー」を経営していたアガベック兄弟でした。その後、横浜にも同社の支店が設立されたと伝えられています。1920年には、同社の社長であったアナヒト・アブガリアンが、世界で初めて女性としてアルメニア共和国の領事(1918年～1920年)に任命されました。中東、主にイラン、イラク、シリア、レバノンおよびインドから来たアルメニア人家族(主に商人)が20世紀初頭に日本に移住し、ここで生活を営んでいました。

現在でも、アルメニア人の約三分の一はアルメニア国外に居住しており、コミタス、アラム・ハチャトゥリアン、シャルル・アズナブール、シェール(シェルリン・サルグシアン)といった世界的に著名なアルメニア人が多数います。国内のアルメニア人と海外のディアスポラは、アルメニア正教会を通じて深い絆で結ばれています。

アルメニア使徒会のカトリコス(大司教)の住居は、エチミアジン大聖堂の敷地内にあり、アルメニアの歴史、特にキリスト教に関連する遺産が多く集められた博物館が周囲に点在しています。合計で6つの博物館が存在します。その中でも最古の建造物である大聖堂博物館は、ゲヴォルグ4世コンスタンティノープルカトリコスの遺言に基づき1874年に建設されました。ここには、キリストの脇腹を刺したロンギヌスの槍、ノアの箱舟の木片、キリストの木製の

杖の一部、洗礼者ホヴァンネス、聖ステパノス・ナハフカ、グリゴル・イルミネーターなど、多くの聖人の遺物が保管・展示されています。

もう1つの博物館はカトリコスの住居であり、面会室の天井は花模様の壁画で装飾され、執務室やその他のホールが設けられています。さらに、1987年にアメリカ系アルメニア人の慈善家アレック・マヌキャン氏によって建設された宝物館も存在します。この博物館は定期的に改装され、青銅器時代初期の儀式用土器から現代の聖油祝福の小瓶、神聖な器具、歴史的祭礼用染織品に至るまで、アルメニアの多彩な文化層を展示しています。展示品の一部は日本を含む東洋諸国との文化交流の成果であり、絨毯などのギャラリーも充実しています。

次に挙げるのは19世紀末に建設された、広々とした4つのホールを持つクリミアン博物館です。ここでは、長年にわたる染織品の保存修復に関するワークショップや祭礼用染織品の修復作業が行われてきました。今年で開館10周年を迎えるルベン・セヴァク美術館には、アルメニアおよび世界各国の芸術家による名作が展示されています。

エチミアジンの博物館は、アルメニアの他の博物館と比較して祭礼服飾品が豊富で、特に染織品の収蔵品が大きな割合を占めています。このため、佐賀大学との数年間の協力は、染織品の保存修復において大変有意義な成果をもたらしています。これらの成果は、佐賀大学芸術地域デザイン学部の吉住磨生部長、同石井美恵准教授、横山翠講師（NHK文化センター）、間舎裕生研究員（東京文化財研究所）、松島朝秀准教授（高知大学）を通じた日本の皆様との強い絆、そして文化庁、外務省、東京文化財研究所をはじめとする日本の関係機関と関係者の皆様の支援と協力の賜物です。

この友情のおかげで、エチミアジンに所蔵されている最も古い染織品の一つ、1441年の旗の修復が実現しました。この作品は佐賀大学から寄贈された絹の生地を用いて、大聖堂の修復家であるマルジャンク・ペトロシアンとマロ・ハルトゥニアン共同作業により修復され、ニューヨークのメトロポリタン美術館の特別展で公開されました。

私たちの協力関係は純粋な志、善意、そして深い敬意に基づいており、これが相互の信頼と頻繁な交流に結びついています。全アルメニア人のカトリコスであるガレギン2世と、エチミアジン大聖堂附属博物館の館長アソギク・カラペチャからも、皆様のおもてなしと温かい歓迎に対する心からの感謝の言葉を伝えたく思います。



メトロポリタン美術館で展示された至宝の刺繍旗(1441年)
出典：(1449) Armenia at the Metropolitan Museum of Art in New York - YouTube

特別講義②

シュシャン・ハコブヤン

アルメニア・日本教育・文化交流センター「いろは」NGO

いろはセンターは、日本語教育と日本文化の普及を目的とするNGO団体で、2014年に設立されました。創設者は日本語教師のホジキャン・ルザン先生と、アルメニア在住の南エ秀一先生です。現在、いろはセンターには約60人のメンバーが所属し、2014年の創設以来、合計で約200人がここで日本語を学んできました。

日本語指導は、3人のアルメニア人講師と3人の日本人講師によって行われています。60人のメンバーは21のグループに分けられ、日本語を学習しています。現在、いろはセンターでは初級から上級までのクラスが設けられており、この体制で教育が行われています。

いろはセンターに通う学生たちは、週に2回の授業を通じて日本語や日本文化に関する知識を深めています。また、彼らは日々の努力の成果を評価するために、毎年行われる日本語能力試験に挑戦し、合格を目指しています。さらに、日本語弁論大会は学習成果を披露する貴重な機会となっており、当センターの生徒たちは積極的に参加し、毎年優秀な成績を収めています。

日本語学習において欠かせない要素の一つは日本人との交流です。この目的のため、いろはセンターの活動の重要な部分は日本語話者との交流会に充てられています。これまでに、日本からの大

学生や社会人と多数の交流会を実施してきました。これらの交流会は、日本語の上達に寄与するだけでなく、日本人の友人を作る絶好の機会を提供し、日本との直接的な結びつきと絆を深めることで、学習意欲の向上にも繋がっています。

日本語を習得する上で、日本と日本文化への理解を深めることも極めて重要です。そのため、アルメニアでの日本文化の紹介はいろはセンターの活動の中でも重要な役割を果たしています。過去7年間で数多くの文化イベントを実施してきましたが、その中からいくつかをここで紹介させていただきます。

1月には、日本のお正月を祝うイベントが行われ、餅つき大会やお正月にちなんだ様々なゲームで賑わいます。2月には節分の行事を行い、恵方巻を作り、美味しくいただきながら「福は内、鬼は外」と声を上げて豆まきをします。

春の行事としては、3月にはひな祭りを、4月にはお花見を楽しみます。お花見の際には、杏の花が美しく咲く季節にセンターの生徒たちとアルメニアに住む日本人たちと共にピクニックに出かけ、様々な味のおにぎりやだんごを味わい、日本の歌を一緒に歌います。

夏のイベントとしては、皆が特に楽しみにしている七夕祭りがあります。短冊に願い事を書いて



笹の葉にかけるだけでなく、日本の夏祭りらしく浴衣を着てエレバンの街を散策するのが恒例となっています。

12月には、センターの設立記念日とクリスマスを祝うイベントを開催します。このイベントは年間行事の中でも特に楽しみにされており、手作りの和食を楽しみながら、学生によるパフォーマンスを鑑賞したり、様々なゲームを楽しんだりします。また、その年の活動の成果を振り返る機会ともなります。この日は、皆が集まり、和やかな時を過ごし、センターの大切な節目を祝う特別な日です。

いろはセンターでは、季節ごとの行事の他にも、日本料理、紙漉き、ツマミ細工、水引、折り紙などの伝統工芸、日本の伝統的な踊りや歌といった日本の文化を体験する機会を提供しています。

これらの活動が認められ、2017年には在アルメニア日本国大使館から在外公館長表彰状を受ける荣誉に浴しました。

2018年には、いろはセンター主催で、アルメニア初の日本音楽祭・大会「音色」を開催し、2019年に第2回を実施しました。その後、新型コロナウイルスの感染拡大により開催が困難となりましたが、第3回は2023年3月に開催されました。

いろはセンターには8歳から60歳までの幅広い年齢層の方がおり、小学生から社会人、主婦まで、

様々な背景を持つ方が集まっています。アニメファン、日本文化に興味を持つ方、留学や就労、旅行を目指す方など、日本語学習の動機は多岐にわたりますが、共通の目標である日本語能力の向上を目指して一生懸命学んでいます。これからはいろはセンターは日本語と日本文化の魅力を発信し、皆さんの目標達成をサポートしたいと考えています。

2021年には日本外務大臣表彰も受賞し、このような評価は私たちにとって大きな励みであり、今後さらに活動に力を入れるモチベーションとなっています。

今後もいろはセンターの活動へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



2

アルメニア研修

染織品保存修復研修



石井 美恵

佐賀大学

横山 翠

NHK文化センター

2 染織品保存修復研修

内 容

開催場所

エチミアジン大聖堂付属博物館

講 師

石井 美恵（佐賀大学）
横山 翠（NHK文化センター）

通 訳

ザリネ・ホヴァキミャン

概 要

- ①染織品調査:光学顕微鏡を使用した織物の組織分析
- ②保存科学:溶解呈色試験、薄層クロマトグラフィーによる染料分析、染織品の退色試験
- ③高度染織品修復技術(ステッチ補強)

エチミアジン大聖堂付属博物館では外務省から供与される予定の保存修復機材の引き渡しが終わっていませんでしたので、同等の機材を日本から持参して実習を行った。デジタル光学顕微鏡を使用して、織物の繊維、紡績、組織を分析して記録したり、染料を推測して、試薬呈色試験と薄層クロマトグラフィーで鑑別する方法を実習した。さらに、18世紀の祭礼服のカフスの高度な修復技術講習も行い、分析診断から保存修復まで総合的な技術力が身に付くような研修を実施した。



光学顕微鏡を使用した織物の組織分析



溶解呈色試験



薄層クロマトグラフィー



染料分析



溶解呈色試験



薄層クロマトグラフィー

スケジュール

2023.12.4	10:30-17:30	開講式 光学顕微鏡の使い方
2023.12.5	10:30-17:30	織物の組織分析と光学顕微鏡調査
2023.12.6	10:30-17:30	織物の組織分析と光学顕微鏡調査
2023.12.7	10:30-17:30	染料分液:溶解呈色試験
2023.12.8	10:30-17:30	染料分析:薄層クロマトグラフィー
2023.12.11	10:30-17:30	高度染織品修復技術(ステッチ補強)
2023.12.12	10:30-17:30	高度染織品修復技術・染織品の変退色試験
2023.12.13	10:30-17:30	高度染織品修復技術
2023.12.14	10:30-17:30	高度染織品修復技術
2023.12.15	10:30-17:30	閉講式、在アルメニア日本国青木豊大使の列席



18世紀の祭礼服(カフス)



高度ステッチ補強技術

3

アルメニア研修

保存科学研修



松島 朝秀

高知大学

3 保存科学研修

内 容

開催場所

エチミアジン大聖堂付属博物館

講 師

松島朝秀（高知大学）

通 訳

シュシャン・ハコブヤン

概 要

- ①博物館における資料保存と展示(環境管理)
- ②保存科学:分析の基礎、材質の観察と分析
- ②ドキュメンテーション・写真撮影

エチミアジン大聖堂付属博物館では外務省から供与される予定の保存修復機材の引き渡しが終わっていませんでしたので、同等の機材を日本から持参して実習を行った。博物館の環境管理の基本である温度、湿度、照度の測定法を講習した。分析の基礎として試料の包埋と顕微鏡観察法、さらに文化財のドキュメンテーションと写真撮影の方法として一眼レフデジタルカメラを使用した可視、紫外、赤外線撮影技術を実習し、保存科学的に博物館資料の調査分析が行えるような研修を実施した。



博物館の環境管理



材質の観察



分析の基礎



色材の分析

スケジュール

2023.12.4	10:30-17:30	開講式 博物館の環境管理
2023.12.5	10:30-17:30	博物館の温湿度管理
2023.12.6	10:30-17:30	博物館の光の管理
2023.12.7	10:30-17:30	材質の観察と分析
2023.12.8	10:30-17:30	材質の観察と分析
2023.12.11	10:30-17:30	ドキュメンテーションと写真撮影
2023.12.12	10:30-17:30	ドキュメンテーションと写真撮影
2023.12.13	10:30-17:30	ドキュメンテーションと写真撮影
2023.12.14	10:30-17:30	歴史文化遺産科学研究センターにて 蛍光X線分析のフォローアップ
2023.12.15	10:30-17:30	閉講式、 在アルメニア日本国青木豊大使の列席



ドキュメンテーション・写真撮影



Visits

アルメニア歴史文化遺産科学研究センター

2022年にJICAが供与した保存修復機材研修を前年度に実施したのでフォローアップをした。蛍光X線分析機は活用され、顕微鏡のレンズ等も交換され、遺物の分析から保存修復へ高いレベルの業務ができる状態となっていた。



アルメニア歴史博物館

研修に参加したマロ・ハルトゥニヤン主任染織品保存修復家によるアルメニア刺繍とレースの展示を見学した。展示ケースの下が引き出し式に設計され、保存と展示と学習を兼ねた展示デザインを採用していた。「私たちは共に文化遺産の中で生かされている」とハルトゥニヤン主任は話す。



マテナダラン古文書館

日本のJICAが2010年に供与した保存修復機材が活用されていた。当時のフォローアップ研修で日本の洋紙専門家が技術研修を実施していた。アルメニアでは入手が困難な和紙の代替としてアルメニアで栽培している桑から「アルメニア紙」を漉いて、羊皮紙や紙本の補修材料にする研究がおこなわれていた。





ARMENIA / JAPAN



令和5(2023)年度 文化庁委託
文化遺産国際協力拠点交流事業

アルメニア共和国における
文化遺産保護のための
高度人材育成拠点交流事業

2024年3月31日発行

編集者 石井 美恵

発行者 石井 美恵

発行所 国立大学法人 佐賀大学芸術地域デザイン学部
〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄1
Tel. 0952-28-8349

デザイン 江副 哲哉(株式会社 あおいろデザイン)

印刷・製本 株式会社 あおいろデザイン

© 2024 佐賀大学

ISBN 978-4-9913034-6-3 (Digital)

ISBN 978-4-9913034-7-0 (Print)

無断で複写することは法律で禁じられています。



ARMENIA / JAPAN

